

高校生の学校不適應への援助に関する考察  
- 学校現場の実態を通して -

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
障害・行動分析クラスター

本研究では、学校不適應で中途退学に至った事例の分析を通して、今日の高校生の不適應の実態と援助における問題点、課題を明らかにし、不適應生徒への援助はどうあるべきか考察したものである。

学校教育現場は、加速度的に進められている教育改革より大きな変革期にある。昨今、不登校を始めとする教育をめぐる問題が頻繁に取り上げられているが、高等学校においても、生徒一人一人の抱える問題が多様化の様相を見せており、学校生活に適應出来ずに中途退学に至る生徒は依然として少なくない。このような状況の中、高校の果たすべき役割、あり方も変容が迫られている。しかし学校は、生徒の問題に対して事例を分析、検証し、どう対応していくか真剣に議論することなく進路変更を容易に認めている実態があり、一人一人に十分な援助が出来ているとは言い難い。この背景には、学校現場を取り巻く様々な問題が複雑に絡んでいると言えよう。

そこで筆者は、何らかの学校不適應により中途退学に至った高校生の事例をいくつかの観点から分析することで、不適應の実態や援助における問題点が明確になり、その問題を捉えてアプローチすることが生徒への援助につながり、意義があるのではないかと考え、事例の分析を試みた。分析にあたっては、分析の枠に家庭環境、社会的資源・ネットワーク、教職員の関係性、学校組織の規定性の4つの観点をを用いた。さらに他校の教師に事例を提示してインタビュー調査を行い、言語データをKJ法によりカテゴライズ化して異なる視点での分析を試みた。

分析の結果、高校生の不適應は家庭環境や個人の資質も見られるが、学校組織の規定性の影響が大きいこと、また、生徒に援助資源はあってもネットワークが欠如しており、活かしきれていないこと、教員同士の連携が欠如しているという学校の問題点が明らかになった。さらに、生徒への対応は学校によっては基本的な対応が欠如している、援助や配慮が不足している、規定に縛られ柔軟性が著しく欠如している等の問題点も挙げられ、対応の仕方は学校間で大きな格差が見られることが明らかとなった。

この結果から、明確となった問題を捉えてアプローチすることや日常の予防的な取り組みを充実させることが学校に求められることであると考え、筆者は学校不適應の援助に向けて、真に“機能する援助システム”の構築の必要性を述べた。さらに疲弊の深刻化が指摘されている援助者である教師にも援助が必要であると述べた。

このようなシステムが構築され、実践していくことが出来れば、教師への連携、機能的なネットワーク、きめ細かな対応が期待出来、生徒への援助は充実して意義あるものとなるであろう。